



電気工学教室助教授山口元太郎君 の殉職を悼む

山口元太郎君は神戸高校より大阪大学工学部電気工学科へ進み昭和37年優秀な成績で卒業され、日立製作所に入社されました。同君はサッカーの選手でスポーツマン精神にみちあふれ、しかも頭脳明哲な好青年で同社においても上下の敬愛をうけ活躍しましたが、大学において本格的な研究者となるべく惜しまれつつ退社し、昭和39年大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻修士課程に入学し、坪村研究室において光化学の知識を習得され、ついで工学研究科電気工学専攻博士課程を経て本年4月電気工学教室文部教官助手となり、山中研究室の中心メンバーとして活躍中でありました。

同君はかねての計画通り化学の知識を十二分に活用してレーザーの研究に没頭されましたので、その業績はきわめてユニークであり、特に色素レーザー、無機、有機の液体レーザーの研究はまさしく世界的で、その論文はしばしば海外研究誌上をかざりました。同君は自らの研究のみならず同僚、後輩の研究指導にも抜群の才幹を示し、教室の心望を一身に集めていました。

たまたま大学紛争の嵐が大阪大学にもおし寄せ、遂にこの9月10日未明、他学科の暴徒の如き学生の一団が電気系本館を占領し、大学本来の目的である研究と教育の場は一瞬にして封鎖されました。しかしながら大学当局は全学の動向を顧慮する結果直ちに無法を排除するには至りませんでした。この間山口君は文字通り連日研究会を主催し、研究の荒廃を防ぎ、研究室の活動を維持されました。しかもこのような困難な状況下において率先封鎖解除の運動を押し進められ、慎重にして、且つねばり強い行動は9月16日、10月2日、10月4日、10月7日の4度にわたる試を経て遂に電気系本館の自力開放に成功したのであります。一方原子力本館は3ヶ月にも及ぶ封鎖が解決せず、工学部の重大問題として残っていました。10月14日に至り原子力教官、学生が遂に立って封鎖を解除した時、同教室教官の要請により同科変電室の応急修理作業に赴き、不幸にも感電し殉職されました。同君の如き前途有為の青年学徒をこのような事態で失うのは誠に遺憾の極みで、電気工学教室の教職員学生一同無念の涙にくれている次第であります。

学問に対する情熱と無法を排し正義を尊重する精神に支えられた同君の行為はまさにわれわれの鑑として長く大阪大学の歴史に残り、大学人を鼓舞激励するものと存じます。

ここに深く哀悼の意を表し、山口君の冥福を祈るものであります。

なお遺族嵯智子未亡人、長男健太郎君（1年6ヶ月）、次男勇二郎君（4ヶ月）のために遺児育英資金を募集致したく、目下計画中であります。いずれ御案内申し上げますが、その節は何卒御賛同の上奮って御拠金賜りますよう御願ひ申し上げます。

大阪大学工学部電気工学教室